



# Red Hat OpenStack Platform 15

## Manage Secrets with OpenStack Key Manager

OpenStack Key Manager (Barbican) を OpenStack デプロイメントと統合する方法。



# Red Hat OpenStack Platform 15 Manage Secrets with OpenStack Key Manager

---

OpenStack Key Manager (Barbican) を OpenStack デプロイメントと統合する方法。

Enter your first name here. Enter your surname here.

Enter your organisation's name here. Enter your organisational division here.

Enter your email address here.

## 法律上の通知

Copyright © 2022 | You need to change the HOLDER entity in the en-US/Manage\_Secrets\_with\_OpenStack\_Key\_Manager.ent file |.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux<sup>®</sup> is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java<sup>®</sup> is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS<sup>®</sup> is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL<sup>®</sup> is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js<sup>®</sup> is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack<sup>®</sup> Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

## 概要

OpenStack Key Manager (Barbican) を OpenStack デプロイメントと統合する方法。

## 目次

|  |    |
|--|----|
| 第1章 概要 .....   | 4  |
| 第2章 バックエンドの選択 .....                                  | 5  |
| 2.1. バックエンド間の移行 .....                                | 5  |
| 第3章 BARBICAN のインストール .....                           | 7  |
| 3.1. オーバークラウドの作成者ロールへのユーザーの追加 .....                  | 8  |
| 3.1.1. barbican 機能のテスト .....                         | 9  |
| 3.2. ポリシーについて .....                                  | 10 |
| 3.2.1. デフォルトポリシーの表示 .....                            | 10 |
| 第4章 BARBICAN でのシークレットの管理 .....                       | 12 |
| 4.1. シークレットの一覧表示 .....                               | 12 |
| 4.2. 新規シークレットの追加 .....                               | 12 |
| 4.3. シークレットの更新 .....                                 | 12 |
| 4.4. シークレットの削除 .....                                 | 12 |
| 4.5. 対称鍵の生成 .....                                    | 13 |
| 4.6. バックアップおよびリストアキー .....                           | 14 |
| 4.6.1. シンプルな暗号化バックエンドをバックアップおよび復元します。 .....          | 14 |
| 4.6.1.1. KEK のバックアップおよび復元 .....                      | 14 |
| 4.6.1.2. バックエンドデータベースのバックアップおよびリストア .....            | 14 |
| 4.6.1.2.1. テストシークレットを作成します。 .....                    | 14 |
| 4.6.1.2.2. barbican データベースのバックアップ .....              | 15 |
| 4.6.1.2.3. テストシークレットの削除 .....                        | 16 |
| 4.6.1.2.4. データベースを復元します。 .....                       | 16 |
| 4.6.1.2.5. 復元プロセスの確認 .....                           | 17 |
| 第5章 BARBICAN HARDWARE SECURITY MODULE(HSM)の統合 .....  | 18 |
| 5.1. バックエンドの選択 .....                                 | 19 |
| 5.2. 暗号化された BLOB .....                               | 20 |
| 5.3. ハードウェアセキュリティモジュール (HSM) のサポート .....             | 20 |
| 5.4. バックエンド間の移行 .....                                | 21 |
| 5.5. HSM アプライアンスとの統合 .....                           | 21 |
| 5.6. BARBICAN と ATOS HSM の統合 .....                   | 21 |
| 5.7. 要件 .....  | 21 |
| 5.8. コントローラーの設定 .....                                | 22 |
| 5.8.1. HSM 接続のテスト .....                              | 23 |
| 5.9. BARBICAN と NCIPHER NSHIELD CONNECT XC の統合 ..... | 24 |
| 5.10. コントローラーの設定 .....                               | 24 |
| 5.10.1. HSM 接続のテスト .....                             | 26 |
| 5.11. BARBICAN と HSM 間の TLS アクティビティの確認 .....         | 26 |
| 5.12. キーストレージに関する考慮事項 .....                          | 27 |
| 5.13. キーのローテーション .....                               | 27 |
| 5.14. BARBICAN および HSM 向けバックアップのプランニング .....         | 27 |
| 第6章 CINDER ボリュームの暗号化 .....                           | 29 |
| 6.1. 既存のボリューム鍵の BARBICAN への移行 .....                  | 31 |
| 6.1.1. 移行手順の概要 .....                                 | 32 |
| 6.1.2. 動作の違い .....                                   | 32 |
| 6.1.3. 移行プロセスの確認 .....                               | 32 |
| 6.1.4. 移行プロセスのトラブルシューティング .....                      | 33 |
| 6.1.4.1. ロール割り当て .....                               | 33 |

|   |           |
|---|-----------|
| 6.1.5. 固定キーの削除                            | 34        |
| <b>第7章 保存されている SWIFT オブジェクトの暗号化</b> ..... | <b>35</b> |
| 7.1. SWIFT 用の AT-REST 暗号化の有効化             | 35        |
| <b>第8章 GLANCE イメージの検証</b> .....           | <b>36</b> |
| 8.1. GLANCE イメージ検証の有効化                    | 36        |
| 8.2. イメージの検証                              | 36        |
| <b>第9章 ボリュームの作成に使用されるイメージの検証</b> .....    | <b>39</b> |
| 9.1. 新規ボリュームでイメージ署名の検証                    | 39        |



## 第1章 概要

OpenStack Key Manager (barbican) は Red Hat OpenStack Platform のシークレットマネージャーです。barbican API とコマンドラインを使用して、OpenStack サービスの使用する証明書、キー、パスワードを一元管理することができます。barbican は現在、本書で説明されている以下のユースケースをサポートします。

- **対称暗号鍵**: 中でも Block Storage (cinder) ボリュームの暗号化、一時ディスク暗号化、および Object Storage (swift) の暗号化に使用されます。
- **非対称鍵と証明書**: glance イメージの署名や検証などに使用されます。

本リリースでは、barbican は Block Storage (cinder) および Compute (nova) コンポーネントとの統合を提供します。

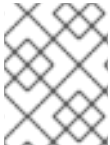


## 第2章 バックエンドの選択

シークレット (証明書、API キー、パスワードなど) は、暗号化された Blob として barbican データベースに保存することも、セキュアなストレージシステムに直接保存することもできます。

シークレットを暗号化された Blob として barbican データベースに保管するには、以下のオプションを使用することができます。

- **単純な crypto プラグイン** : 単純な暗号化プラグインはデフォルトで有効で、1つの対称キーを使用してシークレットの Blob を暗号化します。このキーは、プレーンテキストで **barbican.conf** ファイルに保存されます。



### 注記

現在、シンプルな crypto プラグインは Red Hat でサポートされる唯一のプラグインです。

- **PKCS#11 暗号プラグイン** - PKCS#11 暗号化プラグインは、barbican データベースに保存されているプロジェクト固有の鍵暗号鍵(KEK)でシークレットを暗号化します。これらのプロジェクト固有の KEK は、マスター KEK で暗号化され、ハードウェアセキュリティーモジュール(HSM)に保存されます。すべての暗号化および復号化操作は、in-process メモリーではなく、HSM に置かれます。PKCS#11 プラグインは、PKCS#11 プロトコルを使用して HSM と通信します。暗号化はセキュアなハードウェアで行われ、プロジェクトごとに別の KEK が使用されるため、このオプションは単純な crypto プラグインよりも安全です。

または、シークレットをセキュアなストレージシステムに直接保存することもできます。

- **KMIP プラグイン**: Key Management Interoperability Protocol(KMIP)プラグインは、HSM などの KMIP が有効になっているデバイスで機能します。シークレットは、barbican データベースではなくデバイスに直接保存されます。プラグインは、ユーザー名とパスワードを使用するか、**barbican.conf** ファイルに保存されているクライアント証明書を使用してデバイスに対して認証することができます。
- **Red Hat Certificate System(dogtag)** - Red Hat Certificate System は、一般的な基準と、公開鍵インフラストラクチャー(PKI)の様々な側面を管理するための FIPS 認定セキュリティーフレームワークです。Key Recovery Authority(KRA)サブシステムは、シークレットをデータベースに暗号化された Blob として保存します。マスター暗号化キーは、ソフトウェアベースの Network Security Services(NSS)データベースまたは HSM のいずれかに保存されます。Red Hat Certificate System の詳細は、Red Hat Certificate System の製品ドキュメントを参照してください。



### 注記

**高可用性(HA) オプション** : barbican サービスは Apache 内で実行され、高可用性に HAProxy を使用するように director により設定されます。バックエンド層の HA オプションは、使用されているバックエンドによって異なります。たとえば、単純な暗号化の場合、すべての barbican インスタンスには設定ファイル内に同じ暗号化キーがあり、これにより単純な HA 設定が作成されます。

### 2.1. バックエンド間の移行

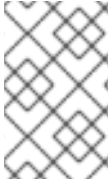
Barbican を使用すると、プロジェクトに異なるバックエンドを定義することができます。プロジェクトにマッピングが存在しない場合は、シークレットはグローバルのデフォルトバックエンドに保存されます。つまり、複数のバックエンドを設定することができますが、少なくとも1つのグローバルバックエ

ンドを定義する必要があります。異なるバックエンド用に提供された heat テンプレートには、各バックエンドをデフォルトとして設定するパラメーターが含まれます。

特定のバックエンドにシークレットを保存してから新規バックエンドに移行する場合には、グローバルのデフォルト(またはプロジェクト固有のバックエンド)として新しいバックエンドを有効にする間に、古いバックエンドを利用可能な状態にすることができます。その結果、古いシークレットは古いバックエンドで引き続き利用できます。

## 第3章 BARBICAN のインストール

Red Hat OpenStack Platform では、barbican はデフォルトで有効になっていません。以下の手順では、既存の OpenStack デプロイメントに barbican をデプロイする方法について説明します。barbican はコンテナ化されたサービスとして実行されるため、この手順では新しいコンテナイメージの準備およびアップロード方法についても説明します。



### 注記

この手順では、barbican が **simple\_crypto** バックエンドを使用するように設定します。**PKCS11** や DogTag 等の追加バックエンドが利用できますが、本リリースでは対応していません。

1. アンダークラウドノードで、barbican の環境ファイルを作成します。これにより、director が barbican をインストールするように指示します（`openstack overcloud deploy [...]`に含まれる場合）。

```
$ cat /home/stack/configure-barbican.yaml
parameter_defaults:
  BarbicanSimpleCryptoGlobalDefault: true
```

- **BarbicanSimpleCryptoGlobalDefault** - このプラグインをグローバルのデフォルトプラグインとして設定します。
  - その他のオプションも設定可能です。
    - **BarbicanPassword**: barbican サービスアカウントのパスワードを設定します。
    - **BarbicanWorkers**: `barbican::wsgi::apache` のワーカー数を設定します。デフォルトで `'%{::processorcount}'` を使用します。
    - **BarbicanDebug**: デバッグを有効にします。
    - **BarbicanPolicies**: barbican 向けに設定するポリシーを定義します。ハッシュ値を使用します（例: `{ barbican-context_is_admin: { key: context_is_admin, value: 'role:admin' } }`）。このエントリは `/etc/barbican/policy.json` に追加されます。ポリシーの詳細は、後のセクションで説明します。
    - **BarbicanSimpleCryptoKek**: キー暗号化キー(KEK)は、指定がない場合は director によって生成されます。
2. このステップでは、barbican 用の新規コンテナイメージを準備します。**configure-barbican.yaml** と関連するすべてのテンプレートファイルを含める必要があります。実際のデプロイメントに合わせて、以下の例を変更します。

```
$ openstack overcloud container image prepare \
  --namespace example.lab.local:5000/rhosp15-rhel8 \
  --tag latest \
  --push-destination 192.168.100.1:8787 \
  --output-images-file ~/container-images-with-barbican.yaml \
  -e /home/stack/virt/config_lvm.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/network-isolation.yaml \
  -e /home/stack/virt/network/network-environment.yaml \
  -e /home/stack/virt/hostnames.yml \
  -e /home/stack/virt/nodes_data.yaml \
```

```
-e /home/stack/virt/extra_templates.yaml \
-e /home/stack/virt/docker-images.yaml \
-e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/services/barbican.yaml \
-e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/barbican-backend-simple-crypto.yaml \
-e /home/stack/configure-barbican.yaml
```

3. 新しいコンテナイメージをアンダークラウドレジストリーにアップロードします。

```
$ openstack overcloud container image upload --debug --config-file container-images-with-barbican.yaml
```

4. 新たな環境ファイルを準備します。

```
$ openstack overcloud container image prepare \
  --tag latest \
  --namespace 192.168.100.1:8787/rhosp15-rhel8 \
  --output-env-file ~/container-parameters-with-barbican.yaml \
  -e /home/stack/virt/config_lvm.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/network-isolation.yaml \
  -e /home/stack/virt/network/network-environment.yaml \
  -e /home/stack/virt/hostnames.yml \
  -e /home/stack/virt/nodes_data.yaml \
  -e /home/stack/virt/extra_templates.yaml \
  -e /home/stack/virt/docker-images.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/services/barbican.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/barbican-backend-simple-crypto.yaml \
  -e /home/stack/configure-barbican.yaml
```

5. これらの変更をデプロイメントに適用するには、オーバークラウドを更新し、以前の `openstack overcloud deploy [...]` で使用したすべての `heat` テンプレートファイルを指定します。以下に例を示します。

```
$ openstack overcloud deploy \
  --timeout 100 \
  --templates /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates \
  --stack overcloud \
  --libvirt-type kvm \
  --ntp-server clock.redhat.com \
  -e /home/stack/virt/config_lvm.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/network-isolation.yaml \
  -e /home/stack/virt/network/network-environment.yaml \
  -e /home/stack/virt/hostnames.yml \
  -e /home/stack/virt/nodes_data.yaml \
  -e /home/stack/virt/extra_templates.yaml \
  -e /home/stack/container-parameters-with-barbican.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/services/barbican.yaml \
  -e /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/barbican-backend-simple-crypto.yaml \
  -e /home/stack/configure-barbican.yaml \
  --log-file overcloud_deployment_38.log
```

### 3.1. オーバークラウドの作成者ロールへのユーザーの追加

ユーザーは、barbican シークレットの作成および編集を **実行するために作成者** ロールのメンバーである必要があります。たとえば、このロールは、それらのシークレットを barbican に保管する暗号化されたボリュームを作成するために必要になります。

1. **creator** という名前の新規ロールを作成します。

```
$ openstack role create creator
+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+
| domain_id | None |
| id | 4e9c560c6f104608948450fbf316f9d7 |
| name | creator |
+-----+-----+
```

2. creator **ロールの id** を取得します。

```
openstack role show creator
+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+
| domain_id | None |
| id | 4e9c560c6f104608948450fbf316f9d7 |
| name | creator |
+-----+-----+
```

3. ユーザーを **creator** ロールに割り当て、関連するプロジェクトを指定します。この例では、**project\_a** プロジェクトの **user1** という名前のユーザーが **creator** ロールに追加されません。

```
openstack role add --user user1 --project project_a 4e9c560c6f104608948450fbf316f9d7
```

### 3.1.1. barbican 機能のテスト

本セクションでは、barbican が正常に動作していることをテストする方法を説明します。

1. テストシークレットを作成します。以下に例を示します。

```
$ openstack secret store --name testSecret --payload 'TestPayload'
+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+
| Secret href | https://192.168.123.163/key-manager/v1/secrets/4cc5ffe0-eea2-449d-9e64-b664d574be53 |
| Name | testSecret |
| Created | None |
| Status | None |
| Content types | None |
| Algorithm | aes |
| Bit length | 256 |
| Secret type | opaque |
| Mode | cbc |
| Expiration | None |
+-----+-----+
```

- 作成したシークレットのペイロードを取得します。

```
openstack secret get https://192.168.123.163/key-manager/v1/secrets/4cc5ffe0-eea2-449d-9e64-b664d574be53 --payload
+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+
| Payload | TestPayload |
+-----+-----+
```

## 3.2. ポリシーについて

barbican はポリシーを使用して、キーの追加または削除など、シークレットに対してアクションを実行できるユーザーを決定します。これらのコントロールを実装するには、keystone プロジェクトロール (以前に作成した **creator** など) は barbican 内部パーミッションにマッピングされます。その結果、これらのプロジェクトロールに割り当てられるユーザーは、対応する barbican パーミッションを受信します。

### 3.2.1. デフォルトポリシーの表示

デフォルトのポリシーはコードで定義されるため、通常は修正は必要ありません。デフォルトのポリシーは、**barbican** ソースコードから生成することで表示できます。

- 追加のコンポーネントをダウンロードし、インストールできるため、実稼働以外のシステムで以下の手順を実行します。この例では、**queens** ブランチに切り替わっているため、別のバージョンを使用する場合は、これを調整する必要があります。

```
git clone https://github.com/openstack/barbican
cd /home/stack/barbican
git checkout origin/stable/queens
tox -e genpolicy
```

このコマンドにより、デフォルト設定が含まれるサブディレクトリーにポリシーファイル( **etc/barbican/policy.yaml.sample** )が生成されます。このパスは、システムの **/etc** ディレクトリーではなく、リポジトリー内のサブディレクトリーを参照します。このファイルのコンテンツは、以下の手順で説明します。

- 生成した **policy.yaml.sample** ファイルは、barbican で使用されるポリシーを記述します。ポリシーは、ユーザーがシークレットおよびシークレットメタデータと対話する方法を定義する4つの異なるロールによって実装されます。ユーザーは、特定のロールに割り当てられているパーミッションを受け取ります。
  - Admin:** シークレットの削除、作成/編集、および読み取りを行うことができます。
  - creator:** シークレットの作成/編集および読み取りが可能です。シークレットを削除できません。
  - observer:** データの読み取りのみが可能です。
  - audit** メタデータのみを読み取ることができます。シークレットを読み取りできません。たとえば、以下のエントリーは、各プロジェクトの **admin**、**observer**、および **creator** の keystone ロールを一覧表示します。右側には、**role:admin**、**role:observer**、および **role:creator** パーミッションが割り当てられていることを確認します。

#

```
#"admin": "role:admin"  
  
#  
#"observer": "role:observer"  
  
#  
#"creator": "role:creator"
```

これらのロールは `barbican` でグループ化することもできます。たとえば、`admin_or_creator` を指定するルールは、`rule:admin` または `rule:creator` のメンバーに適用できます。

3. ファイル内では、`secret:put` および `secret:delete` のアクションがあります。右側には、これらのアクションを実行するパーミッションがあるロールについて確認してください。以下の例では、`secret:delete` は、`admin` および `creator` ロールメンバーのみがシークレットエントリーを削除できることを意味します。さらに、ルールは、そのプロジェクトの `admin` または `creator` ロールのユーザーがそのプロジェクトのシークレットを削除できることを示しています。プロジェクトのマッチは、ポリシーにも定義される `secret_project_match` ルールで定義されます。

```
secret:delete": "rule:admin_or_creator and rule:secret_project_match"
```

## 第4章 BARBICAN でのシークレットの管理

### 4.1. シークレットの一覧表示

シークレットは URI によって識別されます。これは href の値として示されます。以下の例では、直前の手順で作成したシークレットを示しています。

```
$ openstack secret list
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
| Secret href | Name | Created | Status |
Content types | Algorithm | Bit length | Secret type | Mode | Expiration |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
| https://192.168.123.169:9311/v1/secrets/24845e6d-64a5-4071-ba99-0fdd1046172e | None | 2018-
01-22T02:23:15+00:00 | ACTIVE | {u'default': u'application/octet-stream'} | aes | 256 |
symmetric | None | None |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
```

### 4.2. 新規シークレットの追加

テストシークレットを作成します。以下に例を示します。

```
$ openstack secret store --name testSecret --payload 'TestPayload'
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
| Secret href | https://192.168.123.163:9311/v1/secrets/ecc7b2a4-f0b0-47ba-b451-0f7d42bc1746 |
| Name | testSecret |
| Created | None |
| Status | None |
| Content types | None |
| Algorithm | aes |
| Bit length | 256 |
| Secret type | opaque |
| Mode | cbc |
| Expiration | None |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
```

### 4.3. シークレットの更新

シークレットのペイロード(シークレットの削除以外)を変更することはできませんが、ペイロードを指定せずにシークレットを作成した場合は、後で **update** 関数を使用してペイロードを追加することができます。以下に例を示します。

```
$ openstack secret update https://192.168.123.163:9311/v1/secrets/ca34a264-fd09-44a1-8856-
c6e7116c3b16 'TestPayload-updated'
$
```

### 4.4. シークレットの削除



URI を指定してシークレットを削除できます。以下に例を示します。

```
$ openstack secret delete https://192.168.123.163:9311/v1/secrets/ecc7b2a4-f0b0-47ba-b451-0f7d42bc1746
$
```

## 4.5. 対称鍵の生成

対称鍵は、nova のディスク暗号化や swift オブジェクトの暗号化など、特定のタスクに適しています。

1. **order create** を使用して新しい 256 ビットのキーを生成し、barbican に保存します。以下に例を示します。

```
$ openstack secret order create --name swift_key --algorithm aes --mode ctr --bit-length 256 --payload-content-type=application/octet-stream key
+-----+
| Field      | Value                                     |
+-----+
| Order href | https://192.168.123.173:9311/v1/orders/043383fe-d504-42cf-a9b1-bc328d0b4832 |
| Type       | Key                                     |
| Container href | N/A                                   |
| Secret href | None                                   |
| Created    | None                                   |
| Status     | None                                   |
| Error code  | None                                   |
| Error message | None                                  |
+-----+
```

- **--mode**: 生成された鍵は、**ctr** または **cbc** などの特定のモードを使用するように設定できます。詳細は、**NIST SP 800-38A** を参照してください。

2. オーダーの詳細を表示して、生成されたキーの場所を **Secret href** の値として特定します。

```
$ openstack secret order get https://192.168.123.173:9311/v1/orders/043383fe-d504-42cf-a9b1-bc328d0b4832
+-----+
| Field      | Value                                     |
+-----+
| Order href | https://192.168.123.173:9311/v1/orders/043383fe-d504-42cf-a9b1-bc328d0b4832 |
| Type       | Key                                     |
| Container href | N/A                                   |
| Secret href | https://192.168.123.173:9311/v1/secrets/efcfec49-b9a3-4425-a9b6-5ba69cb18719 |
| Created    | 2018-01-24T04:24:33+00:00              |
| Status     | ACTIVE                                  |
| Error code  | None                                   |
| Error message | None                                  |
+-----+
```

3. シークレットの詳細を取得します。

```
$ openstack secret get https://192.168.123.173:9311/v1/secrets/efcfec49-b9a3-4425-a9b6-
```

```

5ba69cb18719
+-----+
| Field      | Value                               |
+-----+
| Secret href | https://192.168.123.173:9311/v1/secrets/efcfec49-b9a3-4425-a9b6-5ba69cb18719 |
| Name        | swift_key                           |
| Created     | 2018-01-24T04:24:33+00:00          |
| Status      | ACTIVE                              |
| Content types | {u'default': u'application/octet-stream'} |
| Algorithm   | aes                                  |
| Bit length  | 256                                  |
| Secret type | symmetric                            |
| Mode        | ctr                                  |
| Expiration  | None                                 |
+-----+

```

## 4.6. バックアップおよびリストアキー

暗号化キーのバックアップおよびリストアのプロセスは、バックエンドのタイプによって異なります。

### 4.6.1. シンプルな暗号化バックエンドをバックアップおよび復元します。

シンプルな暗号化 バックエンドには、2 つの異なるコンポーネント (KEK とデータベース) のバックアップが必要です。バックアップおよび復元プロセスを定期的にテストすることが推奨されます。

#### 4.6.1.1. KEK のバックアップおよび復元

シンプルな暗号化 バックエンドの場合は、マスター KEK を含む **barbican.conf** ファイルを作成する必要があります。このファイルは、セキュリティが強化された場所にバックアップされる必要があります。実際のデータは、次のセクションで説明されているように、Barbican データベースに暗号化された状態に保存されます。

- バックアップから鍵を復元するには、復元された **barbican.conf** を既存の **barbican.conf** にコピーする必要があります。

#### 4.6.1.2. バックエンドデータベースのバックアップおよびリストア

この手順では、簡単な暗号化バックエンド向けに、barbican データベースをバックアップおよび復元する方法を説明します。これは、キーを生成し、シークレットを barbican にアップロードします。その後、barbican データベースのバックアップを作成し、作成したシークレットを削除します。次に、データベースを復元し、先に作成したシークレットが復元されていることを確認します。



#### 注記

これは重要な要件であるため、KEK もバックアップするようにしてください。これは、前のセクションで説明します。

##### 4.6.1.2.1. テストシークレットを作成します。

- オーバークラウドで **order create** を使用して新しい 256 ビットのキーを生成し、barbican に保存します。以下に例を示します。

```
(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret order create --name swift_key --
```

```

algorithm aes --mode ctr --bit-length 256 --payload-content-type=application/octet-stream key
+-----+
| Field      | Value                               |
+-----+
| Order href | http://10.0.0.104:9311/v1/orders/2a11584d-851c-4bc2-83b7-35d04d3bae86 |
| Type       | Key                                  |
| Container href | N/A                                  |
| Secret href | None                                  |
| Created     | None                                  |
| Status      | None                                  |
| Error code  | None                                  |
| Error message | None                                  |
+-----+

```

2. テストシークレットを作成します。

```

(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret store --name testSecret --payload
'TestPayload'
+-----+
| Field      | Value                               |
+-----+
| Secret href | http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/93f62cfd-e008-401f-be74-bf057c88b04a |
| Name       | testSecret                           |
| Created     | None                                  |
| Status      | None                                  |
| Content types | None                                  |
| Algorithm   | aes                                    |
| Bit length  | 256                                    |
| Secret type | opaque                                |
| Mode       | cbc                                    |
| Expiration  | None                                  |
+-----+

```

3. シークレットが作成されたことを確認します。

```

(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret list
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+
| Secret href                               | Name      | Created           | Status |
Content types                               | Algorithm | Bit length | Secret type | Mode | Expiration |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+
| http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/93f62cfd-e008-401f-be74-bf057c88b04a | testSecret | 2018-06-19T18:25:25+00:00 | ACTIVE | {u'default': u'text/plain'} | aes | 256 |
opaque | cbc | None |
| http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/f664b5cf-5221-47e5-9887-608972a5fefb | swift_key | 2018-06-19T18:24:40+00:00 | ACTIVE | {u'default': u'application/octet-stream'} | aes |
256 | symmetric | ctr | None |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+

```

#### 4.6.1.2.2. barbican データベースのバックアップ

**controller-0** ノードにログインした状態で以下の手順を実行します。



### 注記

**barbican** データベースにアクセスできるのは、ユーザー **barbican** のみです。そのため、**barbican** ユーザーのパスワードはデータベースをバックアップまたは復元するために必要です。

1. **barbican** ユーザーのパスワードを取得します。以下に例を示します。

```
[heat-admin@controller-0 ~]$ sudo grep -r "barbican::db::mysql::password"
/etc/puppet/hieradata
/etc/puppet/hieradata/service_configs.json: "barbican::db::mysql::password":
"seDJRsMNRrBdFryCmNUEFPPev",
```

2. **barbican** データベースをバックアップします。

```
[heat-admin@controller-0 ~]$ mysqldump -u barbican -p"seDJRsMNRrBdFryCmNUEFPPev"
barbican > barbican_db_backup.sql
```

3. データベースのバックアップは `/home/heat-admin` に保存されます。

```
[heat-admin@controller-0 ~]$ ll
total 36
-rw-rw-r--. 1 heat-admin heat-admin 36715 Jun 19 18:31 barbican_db_backup.sql
```

#### 4.6.1.2.3. テストシークレットの削除

1. オーバークラウドで、以前に作成したシークレットを削除し、それらのシークレットが存在しないことを確認します。以下に例を示します。

```
(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret delete
http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/93f62cfd-e008-401f-be74-bf057c88b04a
(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret delete
http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/f664b5cf-5221-47e5-9887-608972a5fefb
(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret list

(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$
```

#### 4.6.1.2.4. データベースを復元します。

**controller-0** ノードにログインした状態で以下の手順を実行します。

1. コントローラー上に **barbican** ユーザーにデータベースを復元するためのアクセスを付与する **barbican** データベースがあることを確認します。

```
[heat-admin@controller-0 ~]$ mysql -u barbican -p"seDJRsMNRrBdFryCmNUEFPPev"
Welcome to the MariaDB monitor.  Commands end with ; or \g.
Your MariaDB connection id is 3799
Server version: 10.1.20-MariaDB MariaDB Server

Copyright (c) 2000, 2016, Oracle, MariaDB Corporation Ab and others.
```

Type 'help;' or '\h' for help. Type 'c' to clear the current input statement.

```
MariaDB [(none)]> SHOW DATABASES;
```

```
+-----+
| Database      |
+-----+
| barbican      |
| information_schema |
+-----+
2 rows in set (0.00 sec)
```

```
MariaDB [(none)]> exit
Bye
[heat-admin@controller-0 ~]$
```

2. **barbican** データベースにバックアップファイルをリストアします。

```
[heat-admin@controller-0 ~]$ sudo mysql -u barbican -p"seDJRsMNRrBdFryCmNUEFPev"
barbican < barbican_db_backup.sql
[heat-admin@controller-0 ~]$
```

#### 4.6.1.2.5. 復元プロセスの確認

1. オーバークラウドで、テストシークレットが正常に復元されたことを確認します。

```
(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$ openstack secret list
```

| Secret href  | Name       | Created                   | Status                                   |
|--|------------|---------------------------|--|
| Content types  | Algorithm  | Bit length                | Secret type                              |
|  | Mode       | Expiration                |  |
| http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/93f62cfd-e008-401f-be74-bf057c88b04a | testSecret | 2018-06-19T18:25:25+00:00 | ACTIVE                                   |
| opaque   | cbc        | None                      | {u'default': u'text/plain}               |
| http://10.0.0.104:9311/v1/secrets/f664b5cf-5221-47e5-9887-608972a5fefb | swift_key  | 2018-06-19T18:24:40+00:00 | ACTIVE                                   |
|  | symmetric  | ctr                       | {u'default': u'application/octet-stream} |

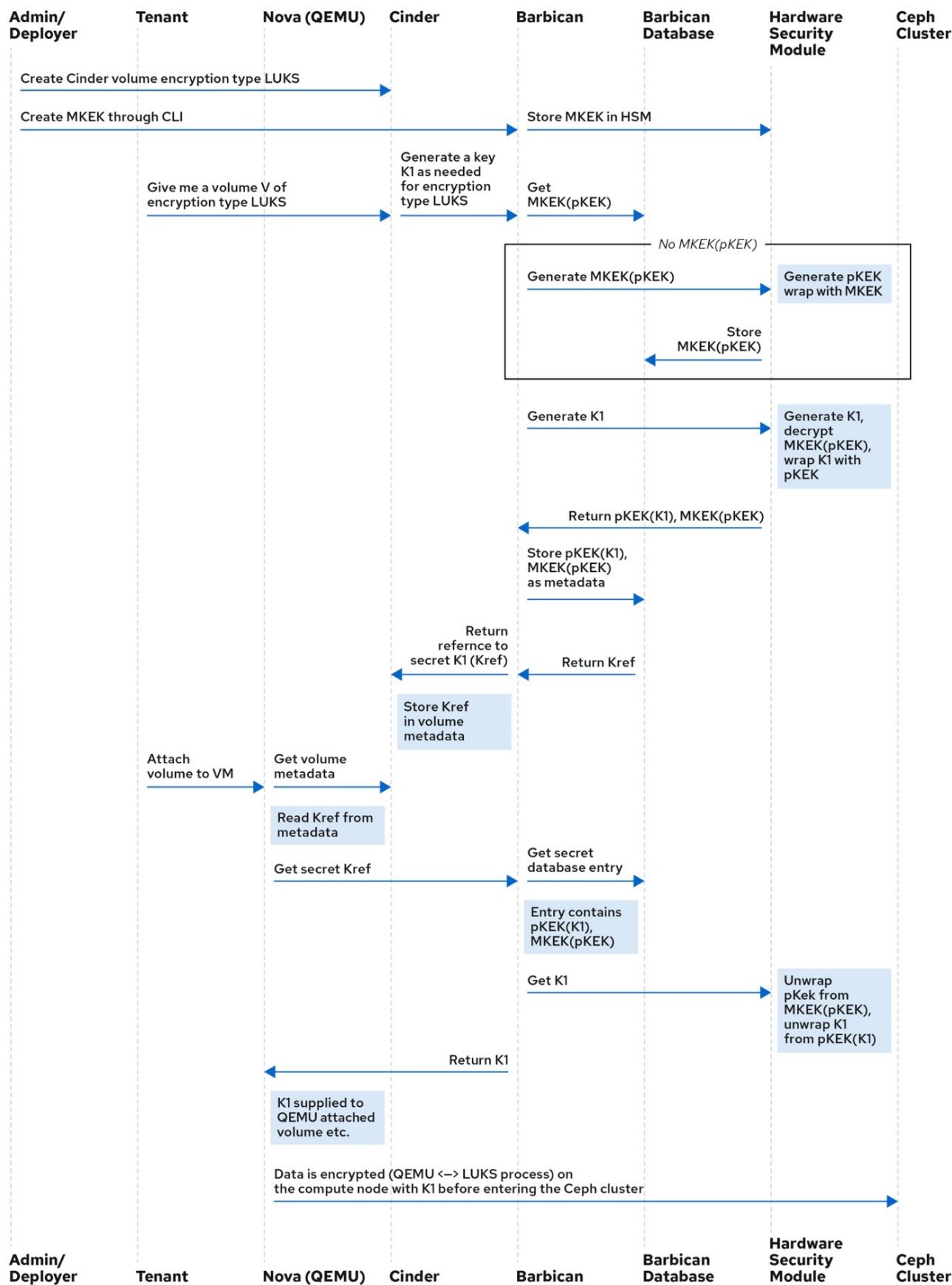
```
(overcloud) [stack@undercloud-0 ~]$
```

## 第5章 BARBICAN HARDWARE SECURITY MODULE(HSM)の統合

OpenStack Key Manager (Barbican) は Red Hat OpenStack Platform のシークレットマネージャーです。Barbican API とコマンドラインを使用して、OpenStack サービスの使用する証明書、キー、パスワードを一元管理することができます。barbican は現在、本書で説明されている以下のユースケースをサポートします。

- **対称暗号鍵:** 中でも Block Storage (cinder) ボリュームの暗号化、一時ディスク暗号化、および Object Storage (Swift) の暗号化に使用されます。
- **非対称鍵および証明書:** とりわけ glance イメージの署名および検証、octavia TLS 負荷分散

本リリースでは、barbican は Block Storage (cinder)、Networking (neutron) および Compute (nova) コンポーネントとの統合を提供します。



OpenStack\_20\_0919

### 5.1. バックエンドの選択

シークレット (証明書、API キー、パスワードなど) は、Hardware Security Module (HSM) アプライアンスを含め、暗号化された Blob として Barbican データベースに保存することも、セキュアなストレージシステムに直接保存することもできます。

## 5.2. 暗号化された BLOB

シンプルな `crypto` プラグインはデフォルトで有効になっており、単一の対称キーを使用してシークレットの Blob を暗号化します。このキーは、プレーンテキストで `barbican.conf` ファイルに保存されます。

## 5.3. ハードウェアセキュリティーモジュール (HSM) のサポート

PKCS#11 暗号化プラグインを使用して、サードパーティーのベンダーが生成した物理的なラックマウントアプライアンスである Hardware Security Module (HSM) にシークレットを保存できます。これらのシークレットは pKEK を使用して暗号化され、Barbican データベースにも保存されます。pKEK は暗号化され、HMAC 操作は HSM にも保管される MKEK キーおよび HMAC 鍵を使用して適用されます。

このガイドでは、Barbican を Atos および nCipher の特定の HSM アプライアンスと統合する方法を説明します。

以下の方法を使用して HSM と対話できます。

- PKCS#11 暗号プラグイン**- PKCS#11 暗号化プラグインは、Barbican データベースに保存されているプロジェクト固有の鍵暗号鍵(KEK)でシークレットを暗号化します。これらのプロジェクト固有の KEK は、マスター KEK によって暗号化されます。PKEK を含む暗号化された Blob は、HMAC キーによる HMAC 処理を受けます。これは HSM にも保存されます。すべての暗号化および復号化操作は、in-process メモリーではなく、HSM に置かれます。PKCS#11 プラグインは、PKCS#11 プロトコルを使用して HSM と通信します。暗号化はセキュアなハードウェアで実行され、プロジェクトごとに別の KEK が使用されるため、このオプションは単純な `crypto` プラグインよりも安全です。
- KMIP プラグイン**: Red Hat では、このアプローチに対応していないことに注意してください。Key Management Interoperability Protocol (KMIP) プラグインは、HSM などの KMIP が有効になっているデバイスと連携します。シークレットは、Barbican データベースの代わりにデバイスに直接保存されます。プラグインは、ユーザー名とパスワードを使用するか、`barbican.conf` ファイルに保存されているクライアント証明書を使用してデバイスに対して認証することができます。
- Red Hat Certificate System (dogtag)**- Red Hat Certificate System は、一般的な基準と、公開鍵インフラストラクチャー (PKI) の様々な側面を管理するための FIPS 認定セキュリティーフレームワークです。Key Recovery Authority (KRA) サブシステムは、シークレットをデータベースに暗号化された Blob として保存します。マスター暗号化キーは、ソフトウェアベースの Network Security Services (NSS) データベースまたは HSM のいずれかに保存されます。Red Hat Certificate System の詳細は、Red Hat Certificate System [の製品ドキュメント](#) を参照してください。



### 注記

高可用性 (HA) オプション: Barbican サービスは Apache 内で実行され、高可用性に HAProxy を使用するように director により設定されます。バックエンド層の HA オプションは、使用するバックエンドによって異なります。たとえば、簡単な暗号化を使用する場合、すべての Barbican インスタンスには設定ファイル内に同じ暗号化キーがあり、単純な HA 設定が作成されます。



## 5.4. バックエンド間の移行

Barbican を使用すると、プロジェクトに異なるバックエンドを定義することができます。プロジェクトにマッピングが存在しない場合は、シークレットはグローバルのデフォルトバックエンドに保存されます。つまり、複数のバックエンドを設定することができますが、定義されたグローバルバックエンドは1つだけでなければなりません。異なるバックエンド用に提供された heat テンプレートには、各バックエンドをデフォルトとして設定するパラメーターが含まれます。

特定のバックエンドにシークレットを保存してから新規バックエンドに移行する場合には、グローバルのデフォルト(またはプロジェクト固有のバックエンド)として新しいバックエンドを有効にする間に、古いバックエンドを利用可能な状態にすることができます。その結果、古いシークレットは古いバックエンドで引き続き利用できます。

## 5.5. HSM アプライアンスとの統合

本章では、Red Hat OpenStack Platform デプロイメントを特定のHSM アプライアンスと統合する方法を説明します。また、考慮する必要のある一般的な操作手順についても説明します。

## 5.6. BARBICAN と ATOS HSM の統合

本セクションでは、PKCS#11 バックエンドを Trustway Proteccio NetHSM アプライアンスに統合する方法を説明します。

## 5.7. 要件

- Red Hat OpenStack Platform 環境における作業用の Barbican デプロイメント
- HSM の統合を計画して、以下の設定を director のデプロイメントに準備できるようにします。これらの値は **barbican-backend-pkcs11-atos.yaml** (以下のセクションで説明) に入力されます。
  - **BarbicanPkcs11CryptoLogin** - PKCS#11 ライブラリー(PIN)が使用するパスフレーズ。
  - インストール前に、ATOS の手順に従ってコントローラーのクライアント証明書を作成する必要があります。オーバークラウドノードがアクセスできる HTTP または FTP サーバーでクライアント証明書、サーバー証明書、および Atos クライアント ISO ファイルをホストします。この資料の一部は(クライアントキーなど)シークレットで、保護する必要があります。これを行うためにパスワードを使用する場合には、**http://user:pass@location** または **ftp://user:pass@location** として場所を指定する必要があります。インストールプロセス中、director は Ansible スクリプトを実行してこれらのファイルを取得します。以下の値で使用されるファイルパスは、インストールプロセスでアクセスできる必要があります。
    - **atos\_client\_iso\_location**
    - **atos\_client\_cert\_location**
    - **atos\_client\_key\_location**
    - **atos\_server\_cert\_location**
    - **atos\_client\_working\_dir**
    - **atos\_client\_iso\_name**

## ■ atos\_hsm\_ip\_address

### 5.8. コントローラーの設定

この手順では、Ansible ロールを使用して Atos クライアントソフトウェアをコントローラーにダウンロードおよびインストールし、Atos 設定ファイルを変更して、事前定義された HSM IP および認証情報に追加します。

1. **barbican-backend-pkcs11-atos.yaml** という名前の **OVERCLOUD\_TEMPLATES** に環境ファイルを作成し、HSM の設定情報を入力します。以下に例を示します。

```
tripleo_heat_templates:
  - /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/services/barbican.yaml
  - /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/barbican-backend-pkcs11-atos.yaml
custom_templates:
  parameter_defaults:
    SwiftEncryptionEnabled: true
    ComputeExtraConfig:
      nova::glance::verify_glance_signatures: true
      nova::compute::verify_glance_signatures: true
    BarbicanPkcs11CryptoLogin: 'sample string'
    BarbicanPkcs11CryptoSlotId: 1
    BarbicanPkcs11CryptoGlobalDefault: true
    BarbicanPkcs11CryptoLibraryPath: '/usr/lib64/libnethsm.so'
    BarbicanPkcs11CryptoEncryptionMechanism: 'CKM_AES_CBC'
    BarbicanPkcs11CryptoHMACKeyType: 'CKK_GENERIC_SECRET'
    BarbicanPkcs11CryptoHMACKeygenMechanism:
'CKM_GENERIC_SECRET_KEY_GEN'
    BarbicanPkcs11CryptoMKEKLabel: 'barbican_mkek_5a'
    BarbicanPkcs11CryptoMKEKLength: 32
    BarbicanPkcs11CryptoHMACLabel: 'barbican_hmac_5a'
    BarbicanPkcs11CryptoATOSEnabled: true
    BarbicanPkcs11CryptoEnabled: true
    ATOSVars:
      atos_client_working_dir: /tmp/atos_client_install
      atos_client_iso_location: https://your server/Proteccio1.09.03.iso
      atos_client_iso_name: Proteccio1.09.03.iso
      atos_client_cert_location: https://your server/proteccio_client.crt
      atos_client_key_location: https://your server/proteccio_client.key
      atos_server_cert_location: https://your server/192_168_11_13.crt
      atos_hsm_ip_address: 192.168.11.12
  resource_registry:
    OS::TripleO::Services::BarbicanBackendPkcs11Crypto: /home/stack/tripleo-heat-templates/puppet/services/barbican backend-pkcs11-crypto.yaml
```

- **BarbicanPkcs11CryptoGlobalDefault** および **BarbicanPkcs11CryptoEnabled**: これらのオプションは、PKCS#11 をグローバルのデフォルトバックエンドとして設定します。
- **BarbicanPkcs11CryptoMKEKLabel**: HSM で生成される mKEK の名前を定義します。director はこのキーを使用して HSM にこのキーを作成します。この名前は新規インストールごとに一意となる必要があります。そうしないと、同じラベル名が使用されると競合が生じる可能性があります。

- **BarbicanPkcs11CryptoHMACLabel**: HSM で生成された HMAC 鍵の名前を定義します。director はこのキーを使用して HSM にこのキーを作成します。



### 注記

デフォルトでは、HSM は最大 32 の同時接続を許可します。この数が超過すると、PKCS#11 クライアントからメモリーエラーが発生することが予想されます。以下に示すように、接続数を計算することができます。

- 各コントローラーには **barbican-api** と 1 つの **barbican-worker** プロセスがあります。
- 各 Barbican API プロセスは **N** 個の Apache ワーカーで実行されます (**N** はデフォルトで CPU の数に設定されます)。
- 各ワーカーには HSM への 1 つの接続があります。

BarbicanWorkers: 各 **barbican-worker** プロセスにはデータベースへの接続が 1 つあり、この設定により API プロセスごとの Apache ワーカーの数を定義できます。デフォルトでは、これは CPU 数に一致します。この設定は、**barbican::wsgi::apache::workers** を設定します。Barbican ワーカーの数は、**barbican.conf** のパラメーター **queue/asynchronous\_workers** によって制御されます。デフォルトは **1** です。現在、この値を管理する tripleO パラメーターはありません。

たとえば、3 つのコントローラーがあり、それぞれに 32 コアがある場合、それぞれのコントローラーの Barbican API は 32 Apache ワーカーを使用します (**BarbicanWorkers** はデフォルトで **32** に設定されます)。そのため、1 つのコントローラーは利用可能な 32 HSM 接続をすべて消費します。この競合を回避するには、各ノードに設定された Barbican Apache ワーカーの数を制限します。この例では、**BarbicanWorkers** を **10** に設定すると、3 つのコントローラーはすべて HSM への 10 個の同時接続を行うことができます。

2. 既存の **openstack overcloud deploy** コマンドへのパスを追加して、スクリプトを再実行します。

### 5.8.1. HSM 接続のテスト

1. テストシークレットを作成します。以下に例を示します。

```
$ openstack secret store --name testSecret --payload 'TestPayload'
+-----+-----+
| Field      | Value                                     |
+-----+-----+
| Secret href | https://192.168.123.163/key-manager/v1/secrets/4cc5ffe0-eea2-449d-9e64-
b664d574be53 |
| Name       | testSecret                               |
| Created    | None                                     |
| Status     | None                                     |
| Content types | None                                     |
| Algorithm  | aes                                       |
| Bit length | 256                                       |
| Secret type | opaque                                   |
```

```
| Mode      | cbc      |
| Expiration | None     |
+-----+-----+
```

- 作成したシークレットのペイロードを取得します。

```
openstack secret get https://192.168.123.163/key-manager/v1/secrets/4cc5ffe0-eea2-449d-
9e64-b664d574be53 --payload
+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+
| Payload | TestPayload |
+-----+-----+
```

## 5.9. BARBICAN と NCIPHER NSHIELD CONNECT XC の統合

本セクションでは、PKCS#11 バックエンドを nCipher nShield Connect XC 暗号化バックエンドと統合する方法を説明します。

- Red Hat OpenStack Platform 環境における作業用の Barbican デプロイメント
- HSM 統合を計画して、以下の設定を Ansible デプロイメントに準備できるようにします。これらの値は **barbican-backend-pkcs11-thales.yaml** (以下のセクションで説明) に入力されます。
  - thales\_client\_working\_dir** および **thales\_client\_tarball\_location** - nCipher nShield Connect XC クライアントソフトウェアを、インストール時にアクセス可能な場所にマウントする必要があります。これらの値は、ファイルの場所とファイル名によって異なります。
  - thales\_client\_working\_dir** - クライアントソフトウェアを展開すると、ソフトウェアの場所がこの値を変更する可能性があります。
  - thales\_km\_data\_location** と **thales\_km\_data\_tarball\_name**: これらはセキュリティー世界のデータを示し、アクセス可能な場所にマウントする必要があります。この資料は秘密であり、保護する必要があります。これを行うためにパスワードを使用する場合には、**http://user:pass@location** または **ftp://user:pass@location** として場所を指定する必要があります。インストールプロセス中、director は Ansible スクリプトを実行してこれらのファイルを取得します。以下の値で使用されるファイルパスは、インストールプロセスでアクセスできる必要があります。
  - thales\_rfs\_key** - RFS サーバーは、設定を更新するコマンドへのログインおよび実行権限を持つユーザーにアクセスできる必要があります。これにより、コントローラーを HSM クライアントとして追加できます。Ansible スクリプトは、提供される秘密鍵を使用して rfs サーバーに ssh を実行します。公開鍵は、最初に認証キーとして rfs サーバーにアップロードする必要があります。

## 5.10. コントローラーの設定

この手順では、Ansible ロールを使用してコントローラーに nCipher クライアントソフトウェアをダウンロードしてインストールし、次に nCipher 設定ファイルを変更して、事前定義された HSM IP および認証情報に追加します。

1. **barbican-backend-pkcs11-thales.yaml** という名前の **OVERCLOUD\_TEMPLATES** に環境ファイルを作成し、nCipher nShield Connect XC の設定情報を入力します。以下に例を示します。

```
tripleo_heat_templates:
  - /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/services/barbican.yaml
  - /usr/share/openstack-tripleo-heat-templates/environments/barbican-backend-pkcs11-thales.yaml

custom_templates:
  parameter_defaults:
    SwiftEncryptionEnabled: true
    ComputeExtraConfig:
      nova::glance::verify_glance_signatures: true
    nova::compute::verify_glance_signatures: true
    BarbicanPkcs11CryptoLogin: 'sample string'
    BarbicanPkcs11CryptoSlotId: '492971158'
    BarbicanPkcs11CryptoGlobalDefault: true
    BarbicanPkcs11CryptoLibraryPath: '/opt/nfast/toolkits/pkcs11/libcknfast.so'
    BarbicanPkcs11CryptoEncryptionMechanism: 'CKM_AES_CBC'
    BarbicanPkcs11CryptoHMACKeyType: 'CKK_SHA256_HMAC'
    BarbicanPkcs11CryptoHMACKeygenMechanism:
'CKM_NC_SHA256_HMAC_KEY_GEN'
    BarbicanPkcs11CryptoMKEKLabel: 'barbican_mkek_10'
    BarbicanPkcs11CryptoMKEKLength: '32'
    BarbicanPkcs11CryptoHMACLabel: 'barbican_hmac_10'
    BarbicanPkcs11CryptoThalesEnabled: true
    BarbicanPkcs11CryptoEnabled: true
    ThalesVars:
      thales_client_working_dir: /tmp/thales_client_install
      thales_client_tarball_location: https://your server/CipherTools-linux64-dev-12.40.2.tgz
      thales_client_tarball_name: CipherTools-linux64-dev-12.40.2.tgz
      thales_client_path: linux/libc6_11/amd64/nfast
      thales_client_uid: 42481
      thales_client_gid: 42481
      thales_km_data_location: https://your server/kmdata_post_card_creation.tar.gz
      thales_km_data_tarball_name: kmdata_post_card_creation.tar.gz
      thales_hsm_ip_address: 192.168.10.10
      thales_rfs_server_ip_address: 192.168.10.11
      thales_hsm_config_location: hsm-C90E-02E0-D947
      thales_rfs_user: root
      thales_rfs_key: |
        -----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
Sample private key
-----END RSA PRIVATE KEY-----

resource_registry:
  OS::TripleO::Services::BarbicanBackendPkcs11Crypto: /home/stack/tripleo-heat-templates/puppet/services/barbican-backend-pkcs11-crypto.yaml
```

- **BarbicanPkcs11CryptoGlobalDefault** および **BarbicanPkcs11CryptoEnabled**: これらのオプションは、PKCS#11 をグローバルのデフォルトバックエンドとして設定します。
- **BarbicanPkcs11CryptoMKEKLabel**: HSM で生成される mKEK の名前を定義します。director はこのキーを使用して HSM にこのキーを作成します。

- **BarbicanPkcs11CryptoHMACLabel**: HSM で生成された HMAC 鍵の名前を定義します。director はこのキーを使用して HSM にこのキーを作成します。

1. 既存の **openstack overcloud deploy** コマンドへのパスを追加して、スクリプトを再実行します。

### 5.10.1. HSM 接続のテスト

1. テストシークレットを作成します。以下に例を示します。

```
$ openstack secret store --name testSecret --payload 'TestPayload'
+-----+-----+
| Field      | Value                               |
+-----+-----+
| Secret href | https://192.168.123.163/key-manager/v1/secrets/4cc5ffe0-eea2-449d-9e64-
b664d574be53 |
| Name       | testSecret                          |
| Created    | None                                 |
| Status     | None                                 |
| Content types | None                                 |
| Algorithm   | aes                                  |
| Bit length  | 256                                  |
| Secret type | opaque                               |
| Mode       | cbc                                  |
| Expiration  | None                                 |
+-----+-----+
```

2. 作成したシークレットのペイロードを取得します。

```
openstack secret get https://192.168.123.163/key-manager/v1/secrets/4cc5ffe0-eea2-449d-
9e64-b664d574be53 --payload
+-----+-----+
| Field | Value |
+-----+-----+
| Payload | TestPayload |
+-----+-----+
```

## 5.11. BARBICAN と HSM 間の TLS アクティビティの確認

barbican は、ベンダーが提供する PKCS#11 ライブラリーを介して HSM と通信します。たとえば、ATOS Proteccio HSM の場合、**proteccio.rc** ファイルを設定することで、HSM クライアントが TLS を使用して HSM と通信するように設定できます。

Atos HSM の場合、CA、サーバー証明書、およびキーを含むファイルがコントローラーにあり、**barbican** ユーザーによって所有されます。**barbican** ユーザーはコントローラー上に存在せず、Barbican コンテナで定義される **barbican** ユーザーであることに注意してください。これにより、これはファイルに数字の識別子として示されます。ファイルは **barbican** ユーザーの読み取り可能でなければなりません(**0400**)。これらのファイルは、Barbican コンテナによってバインドマウントされます。

nCipher nShield Connect XC については、HSM とクライアントソフトウェア間の pkcs#11 トランザクションの追加ログを表示するには、**/opt/nfast/cknfastrc** に以下のエントリーを追加します。

```
CKNFAST_DEBUG=9
CKNFAST_DEBUGFILE=/tmp/hsm_log.txt
```

## 5.12. キーストレージに関する考慮事項

Barbican MKEK および HMAC キーは、ベンダーの PKCS#11 ライブラリーを使用して HSM と通信する Barbican ユーティリティーを使用して生成されます。したがって、MKEK キーおよび HMAC キーは HSM で生成され、HSM が残されることはありません。

director ベースのデプロイメントでは、これらのユーティリティーは最初のコントローラー上のコンテナ内で実行されます。アンダークラウドはこのプロセスには関与しません。

## 5.13. キーのローテーション

director の更新を使用して、MKEK キーおよび HMAC キーをローテーションできます。



### 注記

MKEK と HMAC には同じキータイプです。これは Barbican の制限であり、現時点では後で対処されることが予想されます。

1. キーをローテーションするには、デプロイメントの環境ファイルに以下のパラメーターを追加します。

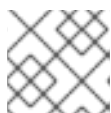
```
BarbicanPkcs11CryptoRewrapKeys: true
```

2. たとえば、ラベルが以下のようなであれば、MKEK キーおよび HMAC 鍵のラベルを変更します。

```
BarbicanPkcs11CryptoMKEKLabel: 'barbican_mkek_10'
BarbicanPkcs11CryptoHMACLabel: 'barbican_hmac_10'
```

値をインクリメントしてラベルを変更できます。

```
BarbicanPkcs11CryptoMKEKLabel: 'barbican_mkek_11'
BarbicanPkcs11CryptoHMACLabel: 'barbican_hmac_11'
```



### 注記

HMAC 鍵タイプは変更しないでください。

3. director を使用して再デプロイし、更新を適用します。director は、MKEK および HMAC のラベルが付けられたキーが存在するかどうかを確認してから、作成します。また、**BarbicanPkcs11CryptoRewrapKeys** パラメーターが **True** に設定されていると、director は **barbican-manage hsm pkek\_rewrap** を呼び出して、既存のすべての pKEK を再度ラップします。

## 5.14. BARBICAN および HSM 向けバックアップのプランニング

このセクションでは、Barbican および HSM バックアップストラテジーを計画する際に考慮すべきコンポーネントについて説明します。

- *barbican* シークレット: これらはデータベースに保存され、定期的にバックアップする必要があります。
- *MKEK* キーおよび*HMAC* キー: これらは*HSM* に保存されます。推奨されるプラクティスについては、*HSM* ベンダーについて確認してください。
- *HSM* クライアント証明書およびキー: これらはコントローラーにあり、コントローラーのファイルバックアップ手順に含める必要があります。これらのファイルは機密の認証情報である点に注意してください。
- *barbican* 設定ファイル



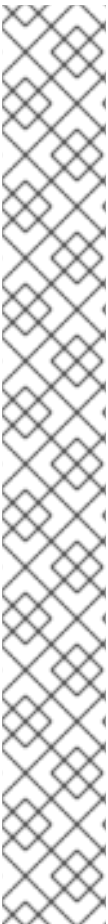
## 第6章 CINDER ボリュームの暗号化

barbican を使用して Block Storage (cinder) の暗号化キーを管理することができます。この設定は、LUKS を使用して、インスタンスに接続されているディスク(ブートディスクを含む)を暗号化します。キー管理はユーザーに透過的です。暗号化種別として **luks** を使用して新規ボリュームを作成すると、cinder はボリュームの対称キーシークレットを生成し、それを barbican に保存します。インスタンスをブート(または暗号化されたボリュームをアタッチ)する場合は、nova はキーを barbican から取得して、そのシークレットをコンピュータノード上の Libvirt シークレットとしてローカルに保存します。



### 重要

Nova は、暗号化されていない場合に初回使用時に暗号化されたボリュームをフォーマットします。作成されるブロックデバイスは、コンピュータノードに提示されます。



### 注記

設定ファイルを更新する場合には、特定の OpenStack サービスはコンテナ内で実行されるようになったことを認識する必要があります。これは、keystone、nova、cinder などのサービスが対象です。その結果、考慮すべき管理プラクティスがいくつかあります。

- 物理ノードのホストオペレーティングシステム上の設定ファイル(例: `/etc/cinder/cinder.conf`)は更新しないでください。コンテナ化されたサービスはこのようなファイルを参照しません。
- コンテナ内で実行されている設定ファイルは更新しないでください。コンテナを再起動すると、変更が失われます。代わりに、コンテナ化されたサービスを変更する必要がある場合は、コンテナの生成に使用される `/var/lib/config-data/puppet-generated/` の設定ファイルを更新します。

以下に例を示します。

- keystone: `/var/lib/config-data/puppet-generated/keystone/etc/keystone/keystone.conf`
- cinder: `/var/lib/config-data/puppet-generated/cinder/etc/cinder/cinder.conf`
- nova: `/var/lib/config-data/puppet-generated/nova/etc/nova/nova.conf`  
変更は、コンテナを再起動した後に適用されます。

1. **cinder-volume** および **nova-compute** サービスを実行しているノードで、nova と cinder の両方がキー管理に barbican を使用するように設定されていることを確認します。

```
$ crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/cinder/etc/cinder/cinder.conf
key_manager backend
castellan.key_manager.barbican_key_manager.BarbicanKeyManager
```

```
$ crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/nova_libvirt/etc/nova/nova.conf
key_manager backend
castellan.key_manager.barbican_key_manager.BarbicanKeyManager
```

2. 暗号化を使用するボリュームテンプレートを作成します。新しいボリュームを作成すると、設定からモデル化できます。

■

```

$ openstack volume type create --encryption-provider
nova.volume.encryptors.luks.LuksEncryptor --encryption-cipher aes-xts-plain64 --encryption-
key-size 256 --encryption-control-location front-end LuksEncryptor-Template-256
+-----+-----+
| Field      | Value |
|-----+-----+
| description | None  |
|-----+-----+
| encryption | cipher='aes-xts-plain64', control_location='front-end', encryption_id='9df604d0-
8584-4ce8-b450-e13e6316c4d3', key_size='256',
provider='nova.volume.encryptors.luks.LuksEncryptor' |
| id         | 78898a82-8f4c-44b2-a460-40a5da9e4d59 |
|-----+-----+
| is_public  | True  |
|-----+-----+
| name       | LuksEncryptor-Template-256 |
|-----+-----+
+-----+-----+

```

3. 新しいボリュームを作成して、**LuksEncryptor-Template-256** 設定を使用するように指定しま  
す。



### 注記

暗号化されたボリュームを作成するユーザーに、プロジェクトで **creator** barbican ロールがあることを確認します。詳細は、**creator** [ロールへのユーザーアクセスの付与](#) セクションを参照してください。

```

$ openstack volume create --size 1 --type LuksEncryptor-Template-256 'Encrypted-Test-
Volume'
+-----+-----+
| Field      | Value |
|-----+-----+
| attachments | []    |
| availability_zone | nova |
| bootable    | false |
| consistencygroup_id | None |
| created_at  | 2018-01-22T00:19:06.000000 |
| description | None  |
| encrypted   | True  |
| id         | a361fd0b-882a-46cc-a669-c633630b5c93 |
| migration_status | None |
| multiattach | False |
| name       | Encrypted-Test-Volume |
| properties |      |
| replication_status | None |
| size      | 1    |
| snapshot_id | None |
| source_valid | None |
| status    | creating |
| type     | LuksEncryptor-Template-256 |

```

```
| updated_at      | None                |
| user_id        | 0e73cb3111614365a144e7f8f1a972af |
+-----+-----+
```

生成されるシークレットは barbican バックエンドに自動的にアップロードされます。

4. barbican を使用して、ディスクの暗号化キーが存在することを確認します。この例では、タイムスタンプがLUKS ボリュームの作成時間と一致します。

```
$ openstack secret list
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+
| Secret href                                     | Name | Created           | Status
| Content types                                 | Algorithm | Bit length | Secret type | Mode | Expiration |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+
| https://192.168.123.169:9311/v1/secrets/24845e6d-64a5-4071-ba99-0fdd1046172e | None |
2018-01-22T02:23:15+00:00 | ACTIVE | {u'default': u'application/octet-stream'} | aes |
256 | symmetric | None | None |
+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+-----+
+-----+
```

5. 新規ボリュームを既存のインスタンスにアタッチします。以下に例を示します。

```
$ openstack server add volume testInstance Encrypted-Test-Volume
```

その後、ボリュームはゲストオペレーティングシステムに表示され、組み込みツールを使用してマウントできます。

## 6.1. 既存のボリューム鍵の BARBICAN への移行

以前のバージョンでは、デプロイメントでディスク暗号化キーの管理に **ConfKeyManager** が使用される可能性がありました。そのため、固定キーが生成され、nova および cinder の設定ファイルに保存されていました。以下の手順で、キーID を barbican に移行することができます。このユーティリティーは、barbican への移行についてスコープ内の **encryption\_key\_id** エントリーのデータベースをスキャンすることで機能します。各エントリーは新しい barbican キーID を取得し、既存の **ConfKeyManager** シークレットが保持されます。



### 注記

以前は、**ConfKeyManager** を使用して暗号化されたボリュームの所有権を再割り当てすることができました。これは、barbican が管理するキーを持つボリュームにはできません。



### 注記

barbican をアクティベートすると、既存の **keymgr** ボリュームが破損しません。

有効な場合、移行プロセスは自動的に実行されますが、次のセクションで説明されているように、一部の設定が必要になります。実際の移行は **cinder-volume** および **cinder-backup** プロセスで実行され、cinder ログファイル内の進捗を追跡できます。

- **cinder-volume:** cinder のVolumes およびSnapshots テーブルに保存される鍵を移行します。
- **cinder-backup:** Backups テーブルの鍵を移行します。

### 6.1.1. 移行手順の概要

1. barbican サービスをデプロイします。
2. **creator** ロールを cinder サービスに追加します。以下に例を示します。

```
#openstack role create creator
#openstack role add --user cinder creator --project service
```

3. **cinder-volume** および **cinder-backup** サービスを再起動します。
4. **cinder-volume** および **cinder-backup** は、移行プロセスを自動的に開始します。
5. 移行が完了したことを示すメッセージのログを監視し、ボリュームが **ConfKeyManager** オールゼロ暗号鍵ID を使用していないことを確認します。
6. **cinder.conf** および **nova.conf** から **fixed\_key** オプションを削除します。この設定が設定されているノードを判別する必要があります。
7. cinder サービスから **creator** ロールを削除します。

### 6.1.2. 動作の違い

barbican が管理する暗号化ボリュームは、**ConfKeyManager** を使用するボリュームとは異なる動作をします。

- 現在、barbican シークレットの所有権を転送することができないため、暗号化されたボリュームの所有権は移動できません。
- barbican は、シークレットの読み取りと削除ができるかより厳しいので、一部の cinder ボリューム操作に影響を及ぼす可能性があります。たとえば、別のユーザーのボリュームの割り当て、割り当て解除、または削除はできません。

### 6.1.3. 移行プロセスの確認

本セクションでは、移行タスクのステータスを表示する方法を説明します。プロセスを起動すると、これらのエントリーの1つがログに表示されます。これは、移行が正しく開始するか、または発生した問題を特定するかどうかを示します。

- **Not migrating encryption keys because the ConfKeyManager is still in use.**
- **Not migrating encryption keys because the ConfKeyManager's fixed\_key is not in use.**
- **Not migrating encryption keys because migration to the 'XXX' key\_manager backend is not supported.** - このメッセージが表示されることはほとんどありません。barbican 以外の別の Key Manager バックエンドに遭遇していたコードを処理するための安全チェックです。これは、コードが1つの移行シナリオ (ConfKeyManager から barbican へ) のみをサポートするためです。
- **Not migrating encryption keys because there are no volumes associated with this host.** - これは、**cinder-volume** が複数のホストで実行され、特定のホストにボリュームが関連付けら

れていない場合に生じる可能性があります。これは、すべてのホストが独自のボリュームを処理するため発生します。

- **Starting migration of ConfKeyManager keys.**
- **Migrating volume <UUID> encryption key to Barbican** - 移行時に、ホストのボリュームがすべて検証され、ボリュームが ConfKeyManager のキー ID を使用している場合に (すべてがゼロ (00000000-0000-0000-0000-000000000000) であることで確認)、このメッセージが表示されます。
  - **cinder-backup** では、このメッセージは若干異なる大文字を使用します。 **Migrating Volume [...]** または **Migrating Backup [...]**
- 各ホストがすべてのボリュームを検査すると、ホストはサマリーステータスメッセージを表示します。

```
`No volumes are using the ConfKeyManager's encryption_key_id.`
`No backups are known to be using the ConfKeyManager's encryption_key_id.`
```

以下のエントリーも表示される場合があります。

**There are still %d volume(s) using the ConfKeyManager's all-zeros encryption key ID. There are still %d backup(s) using the ConfKeyManager's all-zeros encryption key ID.** これらのメッセージはいずれも **cinder-volume** および **cinder-backup** ログに表示される場合がある点に注意してください。各サービスは独自のエントリーの移行のみを処理しますが、サービスは他のステータスを認識します。これにより、**cinder-volume** は **cinder-backup** に移行するバックアップがまだあるかどうかを認識し、**cinder-backup** は **cinder-volume** サービスに移行するボリュームがあるかどうかを認識します。

各ホストは自身のボリュームのみを移行しますが、概要メッセージは、ボリュームの移行が依然として必要なかどうかについて、グローバルアセスメントに基づいています。これにより、すべてのボリュームの移行が完了しているかどうかを確認できます。確認が終わったら、**fixed\_key** の設定を **cinder.conf** および **nova.conf** から削除します。詳細は、Clean up the fixed keys のセクションを参照してください。

## 6.1.4. 移行プロセスのトラブルシューティング

### 6.1.4.1. ロール割り当て

barbican シークレットは、要求に **creator** ロールがある場合にのみ作成できます。これは、cinder サービス自体が作成者ロールが必要なことを意味します。それ以外の場合は、以下のようなログシーケンスが発生します。

1. **Starting migration of ConfKeyManager keys.**
2. **Migrating volume <UUID> encryption key to Barbican**
3. **Error migrating encryption key: Forbidden: Secret creation attempt not allowed - please review your user/project privileges**
4. **There are still %d volume(s) using the ConfKeyManager's all-zeros encryption key ID.**

鍵に関するメッセージは、3 番目の **Secret creation attempt not allowed** です。問題を修正するには、**cinder** アカウントの権限を更新します。

1. **openstack role add --project service --user cinder creator** を実行します。

2. **cinder-volume** および **cinder-backup** サービスを再起動します。

その結果、次の移行試行に成功します。

### 6.1.5. 固定キーの削除



#### 重要

最近 **encryption\_key\_id** は、Queens リリースの一環として、**Backup** テーブルにのみ追加されました。その結果、暗号化されたボリュームの既存のバックアップが存在する可能性があります。すべてがゼロの **encryption\_key\_id** はバックアップ自体に保存されますが、**Backup** データベースには表示されません。そのため、移行プロセスでは、暗号化されたボリュームのバックアップが存在し、all-zero の **ConfKeyMgr** キーID に依存するかを知ることはできません。

キーID を barbican に移行すると、固定キーが設定ファイル内に残ります。**fixed\_key** の値が **.conf** ファイルで暗号化されないため、一部のユーザーにセキュリティ上の問題が発生することがあります。これに対処するには、nova および cinder の設定から **fixed\_key** の値を手動で削除します。ただし、最初にログファイルの出力が完了してから、続行する前にログファイルの出力を確認します。この値がまだ依存するディスクにはアクセスできないためです。

1. 既存の **fixed\_key** の値を確認します。値は、両方のサービスと一致している必要があります。

```
crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/cinder/etc/cinder/cinder.conf keymgr
fixed_key
crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/nova_libvirt/etc/nova/nova.conf keymgr
fixed_key
```

2. **重要**：既存の **fixed\_key** 値のバックアップを作成します。これにより、何らかの問題が発生した場合や、古い暗号鍵を使用するバックアップを復元する必要がある場合に、値を復元できません。
3. **fixed\_key** の値を削除します。

```
crudini --del /var/lib/config-data/puppet-generated/cinder/etc/cinder/cinder.conf keymgr
fixed_key
crudini --del /var/lib/config-data/puppet-generated/nova_libvirt/etc/nova/nova.conf keymgr
fixed_key
```

## 第7章 保存されている SWIFT オブジェクトの暗号化

デフォルトでは、オブジェクトストレージにアップロードされるオブジェクトは暗号化されずに保存されます。したがって、ファイルシステムからオブジェクトに直接アクセスすることが可能です。このため、ディスクを破棄する前に適切に消去しなかった場合には、セキュリティリスクとなってしまいます。barbican を有効にすると、Object Storage サービス (swift) は、保管されている (at-rest) オブジェクトを透過的に暗号化および復号化できます。at-rest 暗号化は、in-transit 暗号化とは異なり、ディスクに保管されている間にオブジェクトが暗号化されることを指します。

Swift はこれらの暗号化タスクを透過的に実行し、オブジェクトは swift にアップロードされる際には自動的に暗号化され、ユーザーに提供される際には自動的に復号化されます。この暗号化と復号化は、Barbican に保管されている同じ (対称) キーを使用して処理されます。



### 注記

データが暗号化された状態で保存されているので、暗号化を有効にし、swift クラスターにデータを追加した後には暗号化を無効にすることはできません。その結果、同じキーで暗号化を再度有効にするまで、暗号化が無効になっている場合は、データは読み取りできなくなります。

### 7.1. SWIFT 用の AT-REST 暗号化の有効化

1. 環境ファイルに **SwiftEncryptionEnabled: True** を追加し、`/home/stack/overcloud_deploy.sh` を使用して **openstack overcloud deploy** を再実行することで、swift 暗号化機能を有効にすることができます。「Barbican のインストール」の章で説明されているように、barbican を有効にする必要があります。
2. swift が at-rest 暗号化を使用するように設定されていることを確認します。

```
$ crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/swift/etc/swift/proxy-server.conf pipeline-main pipeline
```

```
pipeline = catch_errors healthcheck proxy-logging cache ratelimit bulk tempurl formpost
authtoken keystone staticweb copy container_quotas account_quotas slo dlo
versioned_writes kms_keymaster encryption proxy-logging proxy-server
```

結果には、**encryption** のエントリーが含まれている必要があります。

## 第8章 GLANCE イメージの検証

Barbican を有効にした後に、Image サービス (glance) を設定して、アップロードしたイメージが改ざんされていないことを確認できます。この実装では、イメージは最初に barbican に保管されるキーで署名されます。その後、イメージは、付随する署名情報と共に glance にアップロードされます。その結果、各使用前にイメージの署名が検証され、署名が一致しない場合、インスタンスのビルドプロセスに失敗しています。

barbican と glance の統合とは、**openssl** コマンドを秘密鍵と共に使用してアップロードする前に glance イメージを署名できることを意味します。

### 8.1. GLANCE イメージ検証の有効化

環境ファイルで、**VerifyGlanceSignatures: True** の設定でイメージの検証を有効にします。この設定を有効にするには、**openstack overcloud deploy** コマンドを再実行する必要があります。

glance イメージの検証が有効化されていることを確認するには、オーバークラウドのコンピュートノードで以下のコマンドを実行します。

```
$ sudo crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/nova_libvirt/etc/nova/nova.conf glance verify_glance_signatures
```



#### 注記

イメージおよび Compute サービスのバックエンドに Ceph を使用する場合、CoW クローンが作成されます。したがって、イメージ署名の検証は実行できません。

### 8.2. イメージの検証

検証用の glance イメージを設定するには、以下の手順を実施します。

1. glance が barbican を使用するよう設定されていることを確認します。

```
$ sudo crudini --get /var/lib/config-data/puppet-generated/glance_api/etc/glance/glance-api.conf key_manager backend castellan.key_manager.barbican_key_manager.BarbicanKeyManager
```

2. 秘密鍵を生成して、必要な形式に変換します。

```
openssl genrsa -out private_key.pem 1024
openssl rsa -pubout -in private_key.pem -out public_key.pem
openssl req -new -key private_key.pem -out cert_request.csr
openssl x509 -req -days 14 -in cert_request.csr -signkey private_key.pem -out x509_signing_cert.crt
```

3. barbican のシークレットストアにキーを追加します。

```
$ source ~/overcloudrc
$ openstack secret store --name signing-cert --algorithm RSA --secret-type certificate --payload-content-type "application/octet-stream" --payload-content-encoding base64 --payload "$(base64 x509_signing_cert.crt)" -c 'Secret href' -f value https://192.168.123.170:9311/v1/secrets/5df14c2b-f221-4a02-948e-48a61edd3f5b
```





## 注記

後のステップで使用するために、生成された UUID を記録します。以下の例では、証明書の UUID は **5df14c2b-f221-4a02-948e-48a61edd3f5b** です。

4. **private\_key.pem** を使用してイメージに署名し、**.signature** ファイルを生成します。以下に例を示します。

```
$ openssl dgst -sha256 -sign private_key.pem -sigopt rsa_padding_mode:pss -out cirros-0.4.0.signature cirros-0.4.0-x86_64-disk.img
```

5. 作成される **.signature** ファイルを **base64** 形式に変換します。

```
$ base64 -w 0 cirros-0.4.0.signature > cirros-0.4.0.signature.b64
```

6. 後続のコマンドで **base64** 値を変数に読み込みます。

```
$ cirros_signature_b64=$(cat cirros-0.4.0.signature.b64)
```

7. 署名付きイメージを glance にアップロードします。**img\_signature\_certificate\_uuid** の場合、前のステップで barbican にアップロードした署名キーの UUID を指定する必要があります。

```
openstack image create \
--container-format bare --disk-format qcow2 \
--property img_signature="$cirros_signature_b64" \
--property img_signature_certificate_uuid="5df14c2b-f221-4a02-948e-48a61edd3f5b" \
--property img_signature_hash_method="SHA-256" \
--property img_signature_key_type="RSA-PSS" cirros_0_4_0_signed \
--file cirros-0.4.0-x86_64-disk.img
+-----+
----+
| Property          | Value                                     |
+-----+-----+
----+
| checksum          | None                                     |
| container_format  | bare                                     |
| created_at        | 2018-01-23T05:37:31Z                    |
| disk_format       | qcow2                                    |
| id                 | d3396fa0-2ea2-4832-8a77-d36fa3f2ab27    |
| img_signature     |                                           |
|                   | lcl7nGgoKxnCyOcsJ4abbEZEpzXByFPiIgiPeiT+Otjz0yvW00KNN3f10AA6tn9EXrp7fb2xBDE4Ua |
|                   | O3v |
|                   |                                           |
|                   | IFquV/s3mU4LcCiGdBAI3pGsMImZZIQFVNcUPOaayS1kQYKY7kxYmU9iq/AZYyPw37KQI52s  |
|                   | mC/zoO54 |
|                   | zZ+JpnfwlsM=                             |
| img_signature_certificate_uuid | ba3641c2-6a3d-445a-8543-851a68110eab    |
|                   |                                           |
| img_signature_hash_method | SHA-256                                   |
| img_signature_key_type   | RSA-PSS                                   |
| min_disk              | 0                                          |
| min_ram               | 0                                          |
| name                  | cirros_0_4_0_signed                       |
| owner                 | 9f812310df904e6ea01e1bacb84c9f1a        |
```

```

|
| /protected          | False          |
| /size              | None           |
| /status            | queued        |
| /tags              | []             |
| /updated_at        | 2018-01-23T05:37:31Z |
| /virtual_size      | None           |
| /visibility         | shared         |
+-----+
----+

```

8. glance のイメージ検証のアクティビティを Compute ログで表示することができません。/var/log/containers/nova/nova-compute.log たとえば、インスタンスの起動時に以下のエントリーが表示されるはずですが、

```

2018-05-24 12:48:35.256 1 INFO nova.image.glance [req-7c271904-4975-4771-9d26-
cbea6c0ade31 b464b2fd2a2140e9a88bbdacf67bdd8c a3db2f2beaee454182c95b646fa7331f
- default default] Image signature verification succeeded for image d3396fa0-2ea2-4832-
8a77-d36fa3f2ab27

```

## 第9章 ボリュームの作成に使用されるイメージの検証

Block Storage サービス (cinder) は、イメージの作成時に、ダウンロードされたイメージの署名を自動的に検証します。署名は、イメージがボリュームに書き込まれる前に検証されます。

パフォーマンスを向上させるために、Block Storage Image-Volume キャッシュを使用して、新規ボリュームを作成するための検証済みイメージを保存できます。詳細は、『ストレージガイド』の「[Image-Volume キャッシュの設定および有効化](#)」を参照してください。



### 注記

cinder イメージの署名の検証は、Red Hat Ceph Storage または RBD ボリュームでは動作しません。

### 9.1. 新規ボリュームでイメージ署名の検証

この手順では、署名済みイメージから作成されたボリューム署名を検証する方法を説明します。

1. コントローラーノードにログインします。
2. **Volume** ログ `/var/log/containers/cinder/cinder-volume.log` で cinder のイメージ検証アクティビティを表示します。  
たとえば、インスタンスの起動時に以下のエントリが表示されるはずです。

```
2018-05-24 12:48:35.256 1 INFO cinder.image.image_utils [req-7c271904-4975-4771-9d26-cbea6c0ade31 b464b2fd2a2140e9a88bbdacf67bdd8c a3db2f2beaee454182c95b646fa7331f - default default] Image signature verification succeeded for image d3396fa0-2ea2-4832-8a77-d36fa3f2ab27
```

別の方法では、**openstack volume list** および **cinder volume show** コマンドを使用できます。

1. **openstack volume list** コマンドを使用して、ボリューム ID を見つけます。
2. コンピュートノードで **cinder volume show** コマンドを実行します。

```
cinder volume show <VOLUME_ID>
```

3. **volume\_image\_metadata** セクションで **signature verified : True** の行を探します。

```
$ cinder show d0db26bb-449d-4111-a59a-6fbb080bb483
+-----+-----+
| Property          | Value                               |
+-----+-----+
| attached_servers  | []                                   |
| attachment_ids    | []                                   |
| availability_zone  | nova                                 |
| bootable          | true                                 |
| consistencygroup_id | None                                 |
| created_at        | 2018-10-12T19:04:41.000000          |
| description       | None                                 |
| encrypted         | True                                 |
| id                | d0db26bb-449d-4111-a59a-6fbb080bb483 |
| metadata          |                                       |
| migration_status  | None                                 |
```

```

| multiattach          | False          |
| name                 | None           |
| os-vol-host-attr:host | centstack.localdomain@nfs#nfs |
| os-vol-mig-status-attr:migstat | None           |
| os-vol-mig-status-attr:name_id | None           |
| os-vol-tenant-attr:tenant_id | 1a081dd2505547f5a8bb1a230f2295f4 |
| replication_status   | None           |
| size                 | 1              |
| snapshot_id          | None           |
| source_valid         | None           |
| status               | available      |
| updated_at           | 2018-10-12T19:05:13.000000 |
| user_id              | ad9fe430b3a6416f908c79e4de3bfa98 |
| volume_image_metadata | checksum : f8ab98ff5e73ebab884d80c9dc9c7290 |
|                       | container_format : bare |
|                       | disk_format : qcow2 |
|                       | image_id : 154d4d4b-12bf-41dc-b7c4-35e5a6a3482a |
|                       | image_name : cirros-0.3.5-x86_64-disk |
|                       | min_disk : 0 |
|                       | min_ram : 0 |
|                       | signature_verified : False |
|                       | size : 13267968 |
| volume_type          | nfs            |
+-----+-----+

```